ろくおん通信

発行日： １９９３年１２月 １５日

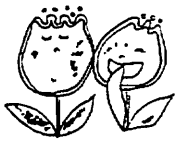
No. 59号

発行者： 盲人情報文化ｾﾝﾀｰ録音製作係

「音声訳」を考える（第10回）

前回までに、漢字の処理を数回にわたって取り上げましたが、多くの方からの感想は、「難しい」という声でした。「難しい」というのは、音声訳者が読者に漢字そのものを分からせようとすることからくる戸惑いや混乱と思われます。

漢字を分からせるために補足するのではなく、書いてある内容をより正しく伝えようとする時に、補足や削除をするということが、説明不足で充分理解してもらえなかった様で反省しています。要するに、音声訳の仕事は、著者が書いている「内容を減らしたり、増やしたりすること」ではなく、「内容をより正しく伝えるために、補足したり削除したりする」ということを理解していただきたいのです。それが音声訳からはずれていると思われる方もあるようですが、「正しく伝える」という視点から音声訳を見直す必要があります。視覚障害者が聞いてわかるように読むことが音声訳の原点であり、墨字の表記を再現させること（中には図表などで必要な場合もありますが）が音声訳の原点ではないからです。今後、様々な例文にあたりながら自分なりに会得していただきたいと思います。前回掲載した「音声訳研修の会」の例題はポイントを掲載していますので参考にしてください。



ルビの読み方 その１

さて、今回からルビの処理について考えていきます。ルビの処理はこれまでマニュアルにあるように「ルビを優先して読み、２回目以降はどちらかに決めて読む」ということで処理してきましたが、それだけでは不適切なケースもいろいろ出ていますので取り上げることにしました。

まず、様々なルビをその性質によって大きく分けるとすれば、

１．著者が読者にそう読ませる為に振られたものと、

２．その語句の補足的な意味で付けているもの、

との２つになります。分類１のルビは具体的には、

１．難しい漢字につけられた読み方のルビ
２．日本語でも特殊な読み（方言、業界語、流行語など）のルビ
３．外国の漢字につけられた現地読み（韓国・中国・琉球など）のルビ

分類２は、

４．日本語につけられた外国語のルビ
５．外国語につけられた日本語のルビ
６．補足・注記の意味でつけられたルビ

などがあげられます。それぞれによってルビを読むときの処理が少しづつ違ってきます。

ルビの処理には以下の５通りが考えられます。

処理１．ルビのみ読む
処理２．ルビを読み語句を読む、次回からはどちらかに決めて読む
処理３．語句を読みルビを読む
処理４．その文章の区切りで、ルビを補足する
処理５．ルビを読まない

ではそれぞれの場合を少し具体例もあげて考えてみます。

１．漢字につけられた読み方のルビ

・一般的に難しい読み方につけられる

【例】　滔々（とうとう）／瀟洒（しょうしゃ）

処理１：ルビのみ読む。

２．日本語でも特殊な読み（方言、業界語、流行語など）につけられたルビ

【例】　新宿（じゅく）／警察（さつ）／都市（まち）／

処理１：ルビのみ読む。

処理２：ルビを読みその語句を読む。２回目以降の読み方も決める。

３．外国の漢字につけられた現地読み（韓国・中国・琉球など）のルビ

【例】　毛遊（もうあしび）　・親方（うえいかた）　・苦力（クーリー）

処理１：ルビ優先で読み、漢字の説明は必要な時以外にはしない。

注意：　日本読みを言い添えるとかえって話しが混乱することがある。

＊「毛遊（モーアシビ＝琉球語）」は「けあそび」という日本語はない。「ウエイカタ」も「オヤカタ」と言い添えると意味が違ってくる。また、中国の「クーリー」も「クリキ」と言い添えると、意味が違ってしまう。

【例】李承晩（リスンマン）　（＊　金大中（キムデジュン）　金日成（キムイルソン）　）

処理２：普通は現地読みだけで良いが、日本読みが一般化している時は日本読みも言い添える。

＊韓国人は、現在の人の場合は、現地読みで通じるようになってきているので金大中（キムデジュン）、金日成（キムイルソン）などはいい添えなくても通じる。

＜普通名詞の場合＞

【例】　◎▼□駅（ヨク）　　◎◎線（ソン）

処理２：普通名詞に現地読みのルビが付いている場合は、日本読みも言い添える。２回目以降の読み方も考える。◎▼□エキ、とか、◎◎センとか普通名詞の部分を日本読みして補足する。

４．日本語につけられた外国語のルビ

【例】　詩（ポエム）／

処理１：ルビのみ読む。

注意：　時々付けられたルビは同じでも熟語が違う場合もあり注意が必要。

【例】　心（ダイモーン）　／　魔人（デーモン）

処理２：ルビを読みその語句を読む。２回目以降の読み方も決める。

５．外国語につけられた日本語のルビ

【例】　shittyな（クソのよう）

処理３：語句を読みルビを読む。

注意：　ルビが前後の言葉にかかる場合はどこまで読むかを考えます。

上の例では、シッティーな・・・という文章なので、読み方としては「shittyな、クソノヨウナ・・・・」

６．補足・注記の意味でつけられたルビ

【例】・・・西郷隆盛（1827-1877）・・・

処理３：時には、その語句の補足などがルビでされている場合があります。語句を読んだ後に補足的に読む。その場で入れるか区切りで入れるかは文章や補足の内容などで判断する。

【例】・・・曖昧模糊（まま）として・・・　　（正しくは→曖昧）

処理４：区切りのよいところまで読んでルビの意味について補足する。

処理５：特に字の説明が必要でない場合はルビを読まずに省略する。

では、次回から具体的な例文で考えていきましょう。　　つづく

前出問題の処理のポイント

【問題１】

昔も今も大工は便利なら何でもとりいれるが、工法技術はとりいれなかったから和風は保たれていたのである。たとえば和風は釘を打つことを嫌う。「柄(ﾎｿﾞ)」（臍？）といって柱や梁の一方に凸字型の突起をつくり、一方には凹字型の「ほぞ穴」をつくり、そこへさしこめば釘を打たないですむし、こゆるぎもしない。和家具は「さしもの」（指物）と呼んですべてさして組立て、これまた釘を打たない。

《処理のポイント》　ここのポイントは、（　）の処理です。漢字をどうするかの問題です。ホゾの漢字の書き方は二通りあり、こちらかも？といった意味で、著者が書いているのでしょうが、ここの話しは漢字の書き方が問題になっているわけではありません。この場合の処理しとしては、カッコ内を省略して読みます。

【問題２】

この日の朝日の別の記事には、「陛下」も敬語も使われていたから、「朝日が敬語不使用に踏み切った」のでないことは明らかだ。

「命までとはいかなくとも、生活、立場、人生をかけて体制・大勢と闘っている多くの人たちにこれまで取材を通して出会ってきました。そうした人たちとつきあいを深めるほど空虚な自分に気がつかざるをえません。せめて皇室敬語廃止ぐらい、いやこれこそ自分の立場でやらなければ――こうした想いが、私を今回の行動に出させたと自分なりに解釈しています」と鹿児島のある若い記者は言う。すべての記事を西暦で書こうという運動も始まっている。

（『客観報道』浅野健一著）

《処理のポイント》　ここのポイントは、「タイセイ」という同音異義語の処理の仕方にあります。「タイセイ、オオゼイと闘い・・・」とも読めないことはありませんが、これでは大勢（多勢）ともとれます。著者が言いたい、政治体制や資本主義体制の「体制」と世の中の流れの「大勢」と闘っている、という内容が正しく伝わりません。ここでは使われている漢字を説明したのでは不親切です。どちらの言葉かが分かるように補足します。「・・・人生をかけてタイセイ、タイセイ、社会体制などの体制と大きな流れ、勢いの大勢、と闘って・・・」などと補足します。

【問題３】

・・・。賭にも似た三度目の手術は師走に行われた。病院のなかのスチームがいつもより大きく音をたてる朝、麻酔をうたれた沼田を乗せたストレッチャーは、看護婦に押されて長い廊下を手術室に向かった。（ここを戻るとき）天井の無影燈をみながら沼田は思った。（生きているだろうか）

四時間にわたる手術後、彼はふたたび自分の病室に連れていかれたが、麻酔からさめたのは翌日の朝で、鼻にはゴム管が入れられ、腕には点滴の針が刺しこまれていた。時々、看護婦が来て、まだ半覚醒の彼の血圧をはかり、モルヒネの注射をうった。すべて二度の手術と同じだった。

数日後、やっと息がつけるようになってから彼はつき添っている妻にたずねた。

「九官鳥は」

「……」

と妻は口ごもった。

「あなたの事で手がいっぱいで、病院の屋上においたまま忘れていたの。気がついて見に行ったら……もう死んでいた」

今更、妻を責めるわけにはいかなかった。・・・・・

（『深い河(ﾃﾞｨｰﾌﾟﾘﾊﾞｰ)』遠藤周作著）

《処理のポイント》　「……」をどうするかがポイントです。普通、「……」の使われ方は様々ですから、記号の意味を解釈して音訳する必要があります。例えば、「間で処理する」「てんてんてん」、「六点リーダー」、「前略」、「中略」、「後略」「なになに」とか文章によってそれにふさわしい処理が考えられます。この場合、このような「処理」では、変な文章になります。「間」だけで処理しても不自然です。

「……」の後の「と」の読み方でわからせるという方法もあるようですが、音声訳の方法としては、「……」を声にならない声として「何かを発する」方法がよいのでは思います。音声訳者自身で考えてみてください。

【問題４】

・・・・・妻が息をひきとったとき、彼は時計を見て時刻をたしかめた。

ここでも、作家は妻の枕元に坐り、眼を凝らして、妻の「死が通過して」いくのをみつめている。そして、「息をひきとる」ことを観察し、その「死」を確認している。

「生きる」とは「息る」といわれ、「生きもの」は「息もの」であり、また「いのち」とは「息の内」といわれる。「生き」は「息」であり、「生きている」とは「息している」ことである。「意気」「勢い」「粋」も「息」に通ずる。また、「むすこ（生す子）」「むすめ（生す女）」に「息子」「息女」の字を当てるのも、生＝息という考えかたからである。

6)『ろくおん通信』ＮＯ．59号　1993年12月15日発行

生＝息なら、死とは呼吸停止のほかのなにものでもない。ところが、レスピレーターの出現によって、呼吸しているのに「脳死」という厄介な問題がおこってきた。「肺臓死」は「息」によって、観察できる「見える死」であったが、「脳死」は普通の人には観察できない「見えない死」である。　（『病いと健康のあいだ』立川昭二著より）

《処理のポイント》　ここのポイントは、たくさんあります。墨字で読む場合は、複雑に感じませんが、これを音声で聞いたら大変複雑になります。だから音声訳者が補足を入れる場合にも思考の妨げにならない補足の仕方にも注意をする必要があります。◎◎の何といった補足の方が思考の邪魔にならずに理解が進むことを考えて補足をします。

「生きるとは、イキヲスルノ「息る」といわれ、生きものはイキヲスルノ「息もの」であり、また「いのち」とは、イキヲスルノ「息の内」といわれる。イキルノ「生き」は、イキスルノ「息」であり、「生きている」は「息している」ことである。イキサカンノ「意気」、「勢い」、イキナノ「粋」もイキスルのイキに通ずる。また、むすこ、イキルトイウジニオクリガナノスニコドモノコ、むすめ、イキルトイウジニ、オクリガナノス、オンナ、に、イキスルノイキニコドモノコ、イキスルノイキニオンナの字を当てるのもイキル、イクオールイキという考え方からである。・・・」

【問題５】

わが病やうやく癒えて歩みこし最上の川の夕浪のおと

斎藤茂吉『白き山』

「いやす」の「い」は語源的には「忌」にあたるといわれ、そこからは「共同体が斎戒して生命気息（いのち・イキ）を復する」というモチーフがうかぶ。漢字の「癒（ユ）」は「愈」に通じ、「兪」から出ており、「兪」は舟で流れを行くさまで、すすむ、やすらか、やわらぐ、いえる、などの意味がある。「愈」はまた「愉」に同じで、これにはよろこぶという意味がある。また「いやす」の「やす」は安らか、優しいに通じる語感をもっている。」

（『病いと健康のあいだ』立川昭二著より）

《処理のポイント》 使われている漢字を熟語で説明することが困難なものがあります。この場合は、漢字の偏やつくり、形などで違いを説明するしか方法がありません。

「いやす」の「い」は語源的には「忌」、イミキラウノイ、にあたるといわれ、そこからは、「共同体が斎戒サイカイモクヨクノサイカイ、斎戒して生命気息（いのち・イキ）を復する」というモチーフがうかぶ。漢字の「癒（ユ）」チユノユ、イヤスは、「愈」、

イヤスノジノヤマイダレガトレタ、ユに通じ、「兪」、イヤスカラヤマイダレトココロガトレタ、ユから出ており、ヤマイダレトココロガトレタ「兪」は舟で流れを行くさまで、すすむ、やすらか、やわらぐ、いえる、などの意味がある。　ヤマイダレノトレタ「愈」はまたユカイノ「愉」に同じで、これにはよろこぶという意味がある。また「いやす」の「やす」は安らか、優しいに通じる語感をもっている。」

正誤表から・・・その33

語句	誤読	正しい読み	語句	誤読	正しい読み
杜氏	トシ	トウジ・トジ	切字	キリジ	キレジ
遊興	ユウコウ	ユウキョウ	極右	ゴクウ	キョクウ
件の	ケンノ	クダンノ	句読点	クドクテン	クトウテン
面通し	メンドオシ	メントオシ	門跡	モンセキ	モンゼキ

二通りの読み方があって各々意味が異なるもの・・・その20

木馬	ｷﾏ	木材運搬用の具	気骨	ｷｺﾂ	自分の信念に忠実で容易に人の意に屈しない意気。気概。
	ｷﾝﾏ	方言　踏み台／短気な人		ｷﾎﾞﾈ	気苦労、心配。
	ﾓｸﾊﾞ	木で馬の形に作った物			
肝心	ｶﾝｼﾞﾝ	肝要、大切	行人	ｺｳｼﾞﾝ	道を歩いている人　旅行する人
	ｷﾓｺﾞｺﾛ	心、魂		ｷﾞｮｳﾆﾝ	仏道を修行する人
御影	ｷﾞｮｴｲ	天皇などの写真	生米	ｷｺﾞﾒ	玄米、黒米
	ﾐｶｹﾞ	神霊、御霊、亡き人の姿ﾅﾄﾞ		ﾅﾏｺﾞﾒ	生のままの米

☆★☆★☆★ お知らせ ☆★☆★☆★

今回は８頁になりましたので、グループへの発送部数は、いつもの半分にさせて頂きました。悪しからずご了承ください。　（録音製作係）

ご案内

第４回
東洋医学音訳研究会

日　時：１２月１７日（金）
　　１５：００～１６：３０
講　師：片山一夫 氏（国立神戸視障ｾﾝﾀｰ）
会　場：盲人情報文化センター　６階
参加費：１００円（資料代等含む）

第３回
音声訳研修の会

場　所：盲人情報文化センター６階
日　時：１９９年1月２８日（金）
　　１３：３０～１５：３０
内　容：音声変換研究（処理の研究）
＊参加費無料。どなたも参加出来ます。

リクエスト図書一覧

以下の図書は利用者から製作依頼を受けている図書です。
グループの方で、音声訳が可能な方がありましたら録音製作係までご連絡ください。

『概説統一原理レベル４』／レベル４編集委員会：<宗教>
『河内野新歳時記』／若林南山偏：<詩歌>
『無功徳58号.59号』／承福寺著：<宗教>
『宇宙船天空に満つる日』／渡辺大起著：<宗教>
『俳句会報みまつ８．９．１０月号』／みまつ俳句会編<詩歌>
『神道の成立』／高取正男著：<宗教>
『みちのくの三愛運動』／角谷晋次著：<宗教>
『アダムとエバと蛇』／ペイゲルス著：<宗教>
『リヴィエラを撃て』／高村薫著：<小説>
『ＰＥＮＴＡＸ取扱い説明書』　＊至急
『さらば群青』／野村秋介著：<伝記>
『私は別人　上・下』／シドニーシェルダン著：<小説>